

育児期のバースレビュー（出産体験想起）に関する文献レビュー

Review of Literature on Birth Review (Childbirth Recall) of Child-rearing Period

中村 美由紀
Miyuki Nakamura

キーワード バースレビュー, 育児期, 文献レビュー

Key Words birth review, child-rearing stage, literature review

抄 録

目的 産褥早期に出産体験を傾聴するバースレビューは、出産の過程での喪失体験に伴う悲嘆の表出を助け、自己肯定感を高め、母親役割取得の一助となる。しかし、出産体験の評価は時間とともに変化するため、時期や方法をさらに検討する必要がある。育児期のバースレビューの研究の現状を明らかにし、今後の方向性を検討する。

方法 過去16年間の原著論文を対象に検索し、研究テーマに合致した7件を、目的および結果の類似性に基づき分類・分析した。

結果 量的研究1件、質的研究6件であり、調査時期は産後1か月までが3件、2～3ヶ月が1件、1～3年が3件であった。分類した結果は「語りの実際」と「語りの意義」、「語りの効果」であった。特に産後1～3年では、ネガティブな内容の語りが多く、否定的な体験は強く記憶に残っていた。

考察 育児期のバースレビューも出産体験での悲嘆の表出を助ける効果があり、特にハイリスク妊娠・分娩の事例では、産褥早期から育児期にかけて複数回の援助が効果的である。

I. 緒 言

バースレビューは、「出産体験の振り返り」あるいは「産後想起」ともいい、母親に自分の出産体験を自由に語ってもらい、傾聴を基本的姿勢として受け止めていく援助である。

出産体験は、幸福な一面と共に、期待や予想と現実の不一致を感じる体験となることがあり、その結果、自己への信頼の低下を招いたり、分娩を契機にこれまでの人生を振り返り、自己へのわだかまりが表面化することもある（小川 2006）といわれている。

Rubin (1967) は、母親役割の願望と矛盾する状態と出会うと、この心理的過程が改善されるまで母親としての活動に移ることができず、出産の想起による悲嘆作業は、母親役割獲得の出発点であるとの見解を示した。これを受けてわが国では、和田ら (1986) が、出産過程の経験を共有した助産師が、産褥早期をはじめ産褥期間中の母親の喪失感情を表出するのを援助することは意義のあることと述べており、分娩時の記憶が欠落

したり誤解していたりする部分を補い、事実を再構成する機会となることから、我が国でも出産に立ち会った助産師による産褥早期のバースレビューが取り入れられるようになった。

一方、我部山ら (2001) の出産体験の評価に関する縦断的研究では、出産体験の評価は出産直後の肯定的評価をピークに時間の経過とともに変化していくとしており、また、大久保 (2015) は出産の振り返りは、語り手と聴き手の間で物語が構成されていく、ナラティブの機会としての要素があると述べている。これらより、出産体験の受け止め方は、出産後の時間の経過や、その後の育児の経験や次子の妊娠・出産を計画する中で変化する可能性があると考えられる。

以上のことから、バースレビューを行う時期や回数、方法について、これまでの産褥早期の分娩に立ち会った助産師による援助だけでなく、もっとフレキシブルに対応する必要があるのではないかと考える。さらに、近年子育て世代包括支援センターの全国展開が進む中、産後ケア事業の心理的ケアの一環としてバースレビューが行われる例

が増えており、また、助産院や育児サークルでもバースレビューのワークショップが開催されるなど、育児期におけるバースレビューに関心がもたれてきている。

そこで今回、育児期の母親の心理的援助に役立てるため、日本国内における育児期のバースレビューの研究の現状を明らかにし、母親の心理的健康への支援の方法を考える上での基礎的な資料を得ることを目的として文献検討を行うこととした。

II. 用語の操作的定義

育児期：一般に第1子出生から小学校入学までをいうが、本研究で取り上げるバースレビューを、出産施設に入院中の産褥早期のバースレビューと区別するため、育児期を出産施設退院後から小学校入学までと定義した。

また、本研究の中で、出産体験の振り返りについて、「バースレビュー」「妊娠・出産・育児にまつわるナラティブ・アプローチ」「出産体験の物語」と、文献により違った表現となっているが、これらについては全て出産体験についてのインタビューを行っているという共通点を以って同義のものとして定義した。

III. 方法

1. 文献検索方法

検索エンジンは医学中央雑誌（医中誌 web 版 ver. 5）で検索のキーワードを、「バースレビュー or 出産体験 or 分娩体験」、さらに、「(出産 or 分娩) and 語り」, 「(出産 or 分娩) and 想起」とし、看護の文献を検索した。文献の種類は原著論文とした。さらに、母子保健の向上を目標とした国民運動計画「健やか親子21」が開始された2001年から2016年の文献に絞った。その結果、「バースレビュー or 出産体験 or 分娩体験」にて202件「(出産 or 分娩) and 語り」にて30件、「(出産 or 分娩) and 想起」にて13件の計245件が検出された。

検出された245件を、抄録または本文を読み込んだうえで、選定基準を1) 出産施設を退院後に出産想起に関する調査を行った文献、2) 出産についてのインタビュー調査を行った文献、3) 育児期の女性を対象とした文献、4) 助産師がインタビュー調査を行った文献とした。選定基準により計238件を除外し、7件を分析対象として育児期のバースレビューに関する看護研究の方向性に

ついて検討した。

2. 分析方法

上記の対象となる文献をテーマ、研究目的及びその結果の内容の類似性に基づき分類・分析し、今後の研究課題について検討した。

IV. 結果

量的研究が1件、質的研究が6件であり、調査された時期は出産施設退院後～産後1か月までが3件、産後2～3か月が1件、産後1～3年が3件の3つに分けられた。また、各研究で抽出されたカテゴリーおよび結果を分析し、以下の3つに分類した。

質的研究で抽出されたカテゴリーは、母親が実際に出産時に体験したことである「語りの実際」と、母親がバースレビューを行ったことの意味づけを語った「語りの意義」の2種類に分類した。また、質的研究のうちの1件については、過去にハイリスク妊娠・分娩を経験した母親を対象とし、「語り実際」の抽出と、IES-R（改訂出来事インパクト尺度）により心的外傷性ストレス症状を測定していた。

一方、量的研究の結果は、バースレビューの効果を既存の尺度で評価したものであり、「語りの効果」と分類した。（表1）。

以下、各研究において抽出されたカテゴリーを【 】で示す。

1. 語りの実際

國清ら（2004）は、出産体験の物語の内容と意味づけの変化をとらえることを目的とした、母親2名への産褥早期と1か月の2回のインタビューを行った。その結果、産褥早期では【何かよくわからないけど、新鮮で忘れたくはない出産】、【命をかけた出産】の2つの主題が抽出され、事実を話す、気持ちを言葉に出す内容であったが、1か月後には【夫とともに創った大きなイベント】【この子のために色々やってきたことは良かった】の2つの主題が抽出され、自己を認める発言が聞かれ、自分なりの意味づけがされた物語へ変化していたと述べている。

また、村上ら（2001）が、出産の相対評価だけではとらえにくい個々の女性の思いを明らかにすることを目的に、産後2～3ヶ月の16名の母親に調査を行った。その結果、自己の出産に十分満足していると評価している女性であっても、様々な

表1 文献の概要

調査時期：産後1か月まで						
タイトル	著者 (発表年)	雑誌名	目的	研究方法	抽出されたカテゴリおよび結果	結論
育児期の母親の出産体験と心理的健康に関する研究	園清恭子他 (2004)	The Kitakanto Medical Journal 54 (2), 125-135	産後早期と産後1か月までの母親の出産体験の物語の内容と意味づけの変化をとらえ、心理的健康を高める援助の在り方を検討する	・産後早期に出産体験についての半構成的面接 ・産後1か月以内に産後体験について半構成的面接	語りの実際 1回目:【何かよくわからないけど、新鮮で忘れたいくない出産】【命をかけた出産】 2回目:【夫とともに創った大きなイベント】【この子のためにいろいろやってきたことは良かった】 語りの意義 「自分でああいう思いだったんだってあらためて自分に振り返ってこれるっていうのがあるんで、感謝しています」「じっくり話すことはとても大事な事、ちゃんと1つ1つ物語りができたんで、すごくありがたいなって」「自分で記憶できてよかったです」「振り返った方がいいと思います絶対だ。」「振り返られたのはよかったですね。」	出産の意味づけの変化として、2例とも1回目より2回目の面接の方が出産に対する自己評価が上がり、語りの内容も、1回目は事実を話す、気持ちや言葉に出すという内容であったのが、2回目は自己を認める発言が聞かれ、自分なりの意味づけがされた物語となって構成されていた。 母親が出産体験を想起して語ることは、バラバラに思い出される事実全体をひとつのまとまりを持った体験としてとらえやすくするといえる。出産体験が「語り直し」されるたびに、母親は自分なりに物語を生成している。
バースレビューを受けた産婦の体験	梅本彰子他 (2011)	日本看護学会論文集: 母性看護, 41, 96-99	バースレビューが産婦にどのような影響を与えているかを分析し、出産を肯定的な体験とするためのバースレビューにの在り方を検討する	・産後0~1日にレビュー用紙の記入と回収 ・3日目に分娩担当によるバースレビュー(半構成的面接) ・退院後2週間頃にレビューに関する半構成的面接	語りの意義 レビュー記載時:【素直な気持ちの表出】【記載しきれない体験】【分娩の再体験】【前向きな気持ちへ変化】 レビュー面接時:【満足感の再確認】【体験をともにすりあわせる】【転換へのステップ】	バースレビューの過程を用紙記載と面接と振り返りを通じ実施することは文章化から言語化へのステップを踏むことにつながる意味があると考えられた。助産師が介入し、振り返りによるレビューを行うことで、記載だけでは表出しきれない産婦の潜在的な思いを導き出した事がわかった。
バースレビューが産後1か月の母親の感情に与える影響	桑田久美子他 (2014)	郡上市民病院年報, 11 (1), 110-114	バースレビューが産後1か月の母親の感情にどのように影響したかを検証する	・産後48時間以内にバースレビュー(半構成的面接) ・産後1か月時にバースレビューを受けたことについての半構成的面接	語りの実際(産後早期) バースレビュー実施時:【満足感の再確認】【体験をともにすりあわせる】【転換へのステップ】 語りの意義(1か月時) 1か月後:【満足感の再確認】【体験をともにすりあわせる】【転換へのステップ】とカテゴリなし	自身の思いを言葉に出すことで気持ちを整理し、共有によりさらに満足なものとして体験する。 分娩後48時間以内にバースレビューを受けた産婦は【言葉にする】【共有する】ことで1か月後においてもバースレビューに対する満足感が持続している。

調査時期：産後2~3ヶ月						
タイトル	著者	雑誌名	目的	方法	抽出された結果およびカテゴリ	結論
自己の出産に十分満足しているか評価した女性が出産の際に抱いた思い	村上明美 (2001)	日本赤十字看護大学紀要, 15, 23-33	「自己の出産に十分満足している」と出産を総体評価している女性が出産の際に抱いた思いを明らかにする	・出産経過に関する半構成的面接	語りの実際 満たされなかった思い:【自分と医療者との認識のズレ】【孤立感】【忙しさがもたらした拒絶感】【出産支援方針の不統一】【バースプランが実施できなかった後悔】【医師優位の医療者関係に対する憤り】 満たされた思い:【偶然得られた喜び】	多くの場合、対象者は出産時に全ての思いが満たされなかったと感じているのではなく、一つか二つの印象的な場面において満たされなかった思いを抱いていた。他に満たされた思いがあることで、満たされない思いは「相殺」されたり、「合理化」されたりする可能性が十分あると考えられた。自己の出産に十分満足しているか評価している女性であっても、出産の際には予測困難な様々な思いを抱いていることが明らかになり、それらは女性にとって満たされない思いであることが多かった

調査時期：産後1~3年						
タイトル	著者	雑誌名	目的	方法	抽出された結果およびカテゴリ	結論
出産体験の心理的影響	末永芳子他 (2005)	保健科学研究誌2, 51-58	出産後2~3年経過した母親の出産体験の語りから、現在の心理状態を「改訂出来事インパクト尺度IES-R」を用いて検討	・妊娠・分娩の体験及び次の妊娠についての半構成的面接 ・IES-Rによる質問紙調査	語りの実際 【行動制限のつらさ】【痛み】【出血の恐怖】【育児不安】【看護師への嫌悪感と怒り】	母親は産後2~3年経過しても、出産体験を鮮明に記憶しており、中でも否定的な体験は強く残る。ハイリスク妊娠・分娩で否定的な体験をした母親の心理状態には、IES-Rの侵入症状や回避症状と関係がある。過去の何らかのハイリスク妊娠・分娩は、母親に心理的影響を及ぼしており、次子の妊娠、出産決定に影響する要因の一つになると推測された。
母親の妊娠・出産・育児にまつわる体験の『語り』の意味づけ 育児経験のある助産師によるナラティブ・アプローチ	川村千恵子他 (2009)	日本保健医療行動科学会年報, 24, 117-133	育児期(1~3歳)の母親に、子育て経験のある助産師が、妊娠・出産・育児にまつわるナラティブ・アプローチを行い、『語り』の実際と、母親による『語り』の意味づけを明らかにする	・妊娠~出産・育児についてのナラティブ・アプローチ(半構成的面接)	語りの実際:【自分の特徴】【実母との関係】【喪失体験】【出産前までの不安な気持ち】【夫婦関係】【義母との関係】【子どもが病気になった時のこと】【母乳哺育へのこだわり】【出産・医療への思い】【家族・親族の協力】【子どもの気質・子どもとの関係】【友人関係】【幼稚園・保育園の先生との関係】【育児サークルのこと】【しんどい育児】【母親自身の健康不安】【将来の夢】 語りの意義づけ:【信念や行動の変化】【新たな意味の生成】【秩序立て】【気持ちの刷新】【語りの場の保障】【時間の感覚】	「語りの実際」では、negativeな内容の語りが多い傾向にあった。他者との関係性の語りについては様々な個人の価値観で捉えられていた。 負の側面であるネガティブな出来事や感情が語られることで気持ちが解放され、物語が書き換えられ、再評価され自己へ受け入れられる。助産師との語りを行うことで【語りの場の保障】がなされ、語りを通して【秩序立て】が行われ、そこに【新たな意味が生成】される。さらにこれが進み【信念や行動の変化】となる。いずれの段階でも【気持ちの刷新】という効用が得られる。語りの意味づけが【秩序立て】の段階で【時間の感覚】に影響しているととらえられた。
乳幼児をもつ母親への助産師によるナラティブ・アプローチの効果研究	川村千恵子他 (2011)	日本保健医療行動科学会年報, 26, 104-117	育児期の母親に妊娠以前から、出産・育児、将来の展望までについてのナラティブ・アプローチを行い、母親の感情やウェルビーイング、対人関係にもたらす変化や効果を指標を使って評価する	・ナラティブ・アプローチの介入の前後と1か月後に質問紙調査(短縮版感情プロフィール検査(POMS), TMD得点、乳幼児の母親のウェルビーイング尺度、関係性の中で自立尺度)	語りの効果	ナラティブ・アプローチの効果として、「怒り-敵意」が低下し、「心理面のウェルビーイング」「関係性のなかでの自立」尺度の「18項目全体」。「自信をもって生きる」の3つの得点が有意に高くなる事が明らかになった。しかしながら、1か月後の値がいずれも介入前程度に戻っており、1回のナラティブ・アプローチの効果の限界も示された。

満たされない思いを抱えていることが多く、その内容から【自分と医療者との認識のズレ】【孤立感】【忙しさがもたらした拒絶感】【出産支援方針の不統一】【バースプランが実施できなかった後悔】【医

師優位お医療者関係に対する憤り】の9つのカテゴリが抽出されていた。また、全ての思いが満たされなかったと感じているのではなく、一つか二つの印象的な場面において満たされない思いで

あることが多かったとしている。

さらに、川村ら（2009）は、育児期の母親の妊娠・出産・育児にまつわる「語り」の実際と意味づけを明らかにすることを目的に、産後1～3年の母親25名への調査を行っている。この結果として、語りの実際ではネガティブな内容が多い傾向にあり、カテゴリとして、【自分の特徴】【実母との関係】【喪失体験】【出産前までの不安な気持ち】【夫婦関係】【義母との関係】【子どもが病気になった時のこと】【母乳哺育へのこだわり】【出産・医療への思い】【家族・親族の協力】【子どもの気質・子どもとの関係】【友人関係】【幼稚園・保育園の先生との関係】【育児サークルのこと】【しんどい育児】【母親自身の健康不安】【将来の夢】の17個が抽出されていた。

2. 語りの意義

語りの意義については、4件の調査で抽出されている。このうち、産後1か月までに調査が行われた3件は、産褥早期と出産施設退院後の2回の面接が行われ、2回目の面接で産褥早期のバースレビューの効果を評価することを目的としていた。

國清ら（2004）の調査では褥婦2名を対象とし、カテゴリとしては抽出されていないが、「こういう思いだったんだなってあらためて自分に返ってくるっていうのがある」「じっくり話すことはとても大事な事、ちゃんと1つの物語ができた」「振り返れたのはよかったですね。」などの発言から、2事例ともに母親自ら振り返りの必要性を述べている。

また、梅本ら（2010）の調査では褥婦7名を対象とし、面接前のレビュー用紙記載時は【素直な気持ちの表出】【記載しきれない体験】【分娩の再体験】【前向きな気持ちへ変化】の4つ、その後のレビュー面接時には【満足感の再確認】【体験をともにすりあわせる】【転換へのステップ】の3つのカテゴリを抽出している。

更に、桑田ら（2014）の調査は褥婦5名を対象としており、先の梅本ら（2010）の研究を参考に、【満足感の再確認】【体験をともに摺りあわせる】【転換へのステップ】の3つのカテゴリに分類している。

さらにもう1件は、前述した川村ら（2009）の産後1～3年の母親25名への調査において、語りの母親の主観的な体験として、【信念や行動の変化】【新たな意味の生成】【秩序立て】【気持ちの刷新】【語りの場の保障】【時間の感覚】の6つの

カテゴリを抽出している。

このように、以上の4件の結果は、調査時期に関わらずほぼ同様のカテゴリが抽出されており、これらを統合すると、育児期のバースレビューの意義は、分娩の満足感の再確認と物語としての秩序立てが行われ、新たな気持ちに転換されていることであった。

3. 語りの効果

川村ら（2011）は、産後1～3年の母親20名を対象に、妊娠・分娩・育児に関するナラティブ・アプローチを行う前後にPOMS（短縮版感情プロファイリング検査）、乳幼児の母親のウェルビーイング尺度、関係性の中での自立尺度を用いた質問紙調査を行い、ナラティブアプローチの効果を検証している。その結果、短縮版感情プロファイル検査の「怒り－敵意」、TMD得点が介入前後で有意に低下し、介入によって全般的な負の感情が減少していた。また、乳幼児の母親のウェルビーイング尺度の「心理面でのウェルビーイング」、「関係性のなかでの自立」尺度の「18項目全体」の総得点、「自信をもって生きる」が介入前後で有意に高くなっていった。しかし、上記のいずれもその一か月後の得点は、介入前程度の値に戻っており、1回のナラティブ・アプローチの効果には限界があることが示されていた。

4. ハイリスク妊娠・出産における主観的体験

末永ら（2005）の調査は、出産体験がその後の心理状態にどのように受け止められているのかを検討することを目的に、一人目を出産後妊娠していない産後2～3年の母親3名を対象としている。その結果「語りの実際」として、【行動制限のつらさ】【痛み】【出血の恐怖】【育児不安】【看護師への嫌悪感と怒り】の5つを主観的体験として抽出しており、特に否定的な体験は数年経過しても強く残るとしていた。また、対象となった3名のうち2名にIES-R（改訂出来事インパクト尺度）の侵入症状や回避症状が見られたが、PTSD（心的外傷後ストレス反応）の高危険者はいなかった。

V. 考察

1. バースレビューの実施時期による語りの内容と効果

1) 産後1か月まで

桑田ら（2014）は、自身の思いを言葉に出すことで気持ちを整理し、共有によりさらに満足なも

のとして体験することで、バースレビュー時に語った満足感が1か月後の満足感につながっていると考えると述べている。また國清ら（2004）も産褥早期には、出産全体の振り返りを促す援助を実施することが、その後体験を意味づけしていく段階への移行をスムーズにするものと考えられたと述べており、産褥早期のバースレビューは産後1か月までの母親の心理に良い影響を与えることが示唆されていた。また、國清ら（2004）は、産褥早期の面接においては、その時の感じたままの気持ちや分娩経過中の事実をただ言葉にして表現することが多く、自己評価も低かったが、産褥1か月後には、自己評価も高まり、自分自身の言葉によって再構成された物語が語られていたと述べている。鈴木（2015）も、「出産体験を自分のものにする」ためのバースレビューとは、出産を通して体験したことを女性が自分の物語の中に入れて納得のいくような物語にしていくということであり、分娩後の一度きりのバースレビューで、これを成し遂げるのはあまりに困難な作業であると述べていることから、産褥早期の1回のみでなく、育児期にかけて複数回の援助が効果的であることが考えられた。

2) 産後2～3か月

産後2～3か月の母親を対象にインタビューを行った村上（2001）の調査では、総体的には自己の出産に「十分満足している」と評価していても、インタビューを通して振り返ることにより、満たされないと感じた様々な思いが表出されている。我部山ら（2001）は、出産体験の評価は出産直後の肯定的評価をピークに時間の経過とともに変化していくとしていることから、産後2～3か月以降の「語りの実際」では産後1か月までに比べて否定的な内容が多くなっていたと考える。また、村上は、多くの施設で一般的に行われている相対的な出産満足評価は曖昧さを多分に含んでいること、対象者の出産満足度の評価を行う際には、対象者が自己の出産に対し何を重視していたのかを明確にし、個々の妊娠、分娩、産褥の経過などを考慮しながら実施することが望まれると述べている。この研究では、母親自身の言葉では「語りの意義」の表出はされていないが、この時期のインタビュー調査において、対象となった母親が出産体験における満たされない思いを表出したことは、母親が喪失感情を表出できた点から、この時期

のバースレビューにも意義があると考えられる。

3) 産後1～3年

産後1～3年の母親を対象とした調査で、川村（2009）は、「語り」は母親の主観的な体験を提示するだけでなく、新たな意味の生成を行ったり、気持ちが刷新されたり心理的なプラスの効果を得られていたとしている。また同じく川村（2011）のナラティブ・アプローチの効果を中心に心理的な尺度を使用して評価した研究では、ナラティブ・アプローチの効果として、「怒り－敵意」が低下し、「心理面のウェルビーイング」「関係性の中での自立」尺度の「18項目全体」「自信をもって生きる」の3つの得点が有意に高くなることが明らかになっており、この時期のバースレビューにも効果があることが示唆されていた。

また、バースレビューの方法として、産後2～3か月以降の調査においては、分娩に立ち会っていない助産師がバースレビューを行っているが、それぞれにおいてバースレビューの効果が示唆されている。東野（2006）は、レビューの実施者について、出産に立ち会わずとも褥婦が話すことを十分に傾聴できる専門家であればよいことを述べており、必ずしも出産に立ち会った助産師でなくても効果があると考えられた。

2. ハイリスク妊娠・分娩を経験した事例に対する育児期のバースレビュー

産後1～3年のハイリスク妊娠・分娩を経験し、次子を妊娠していない母親を対象に末永（2005）らの調査では、妊娠・分娩後数年経過しても特に否定的な体験は残ることを明らかにし、次子出産の決定要因への影響があることを示唆している。ハイリスク妊娠・分娩の事例について、鈴木（2015）は、予想外に吸引分娩となった褥婦が産褥早期のバースレビューでは分娩を肯定的に受け止めていたにも関わらず、その後の次子出産前には過去の分娩体験が思い出され不安でたまらなくなると語った例を報告しており、伊藤（2015）も、出産による喪失経験や心の傷つき経験は、それを経験した女性が自分の言葉で語れるようになるまで、時間を要する可能性があるとして述べている。以上のことから、ハイリスク妊娠・分娩を経験した事例については、産褥早期だけでなく、複数回の援助が必要であると考えられた。

3. 今後の研究における課題

今回検討した7文献のうち、産後1か月以内に調

査された3文献は、産褥早期にバースレビュー面接を受けた母親を対象に、産後2週間～1か月の時点で2度目の面接を行っており、産褥早期にバースレビューを受けていない母親については調査されていない。一方、2～3か月以降の調査では、産褥早期にバースレビューが行われていたかは不明である。産褥早期にバースレビューを受けることで、一度は出産体験を統合するという過程を経験することから、育児期のバースレビューではよりポジティブな内容が表出される可能性もある。そのため今後は産褥早期のバースレビューを受けたかどうかにより、その後の育児期のバースレビューに違いがあるかどうかを検討する必要があると考える。

また、國清ら(2004)は、出産体験が「語り直し」されるたびに母親は自分なりに物語を生成していくと述べており、また、川村ら(2011)のナラティブ・アプローチの効果研究では、1回の援助では効果に限界があることが示されていることから、複数回の援助による効果についても検討する必要がある。さらに、近年増加している高齢初産婦などに特化した調査や、ハイリスク事例に対する複数回の援助に関する調査も必要であると考えられる。

VI. 結 論

我が国における育児期のバースレビューに関する研究の現状を明らかにし、今後の研究の方向性を明確にするために文献検討を行った。その結果、先行研究はまだ少ないが、産褥早期と同様に育児期のバースレビューも出産体験における母親の喪失感情の表出を助け、事実を再構成する機会として有意義であることが示唆された。また、産後時間が経過するとともに、母親にとって妊娠・出産体験でのネガティブな記憶が残りやすくなると考えられたため、特にハイリスク妊娠・分娩を経験した母親に対しては育児期での援助が有効であると考えられた。また、今後の研究課題として、産褥早期にバースレビューを行った場合と行わない場合の育児期の語りの内容の比較や、近年増加している高齢初産婦などの特定の背景に焦点を当てた調査も必要であると考えられる。

付 記

本研究は平成28年度聖泉大学看護学部研究助成

を受けて実施したものである。

文 献

- 東野妙子(2006):バースレビューの方法,ペリネイタルケア,25(8),15-19
- 伊藤道子(2015):ナラティブからひも解くバースレビュー,助産師雑誌,69(12),994-997.
- 我部山キヨ子,堀内寛子,脇田満里子,他(2001):出産体験の評価に関する縦断的研究—産後6年迄の出産体験の評価の推移—,母性衛生,42(4),591-598.
- 川村千恵子,石原あや,森圭子(2009):母親の妊娠・出産・育児にまつわる体験の『語り』の意味づけ—育児経験のある助産師によるナラティブ・アプローチ—,日本保健医療行動科学学会年報,24,117-133.
- 川村千恵子,森圭子(2011):乳幼児をもつ母親への助産師によるナラティブ・アプローチの効果研究,日本保健医療行動科学学会年報,26,104-117.
- 國清恭子,阿部祥子,土江田奈留美,他(2004):育児期の母親の出産体験と心理的健康に関する研究,The Kitakanto Medical Journal,54(2),125-135.
- 桑田久美子,河合幸子,今井七重,他(2014):バースレビューが産後1か月の母親の感情に与える影響,郡上市民病院年報,11(1),110-114.
- 村上明美(2001):自己の出産に十分満足していると評価した女性が出産の際に抱いた思い,日本赤十字看護大学紀要,15,23-33.
- 大久保功子(2015):バースレビュー再考—取り組む際に気を付けたいこと—,助産師雑誌,69(12),982-987.
- 小川朋子(2006):「産んでよかった」と実感できるように—バースレビュー徹底研究—総論—バースレビューの意義,ペリネイタルケア,25(8),756-750.
- Rubin, Reva.(1967): Attainment of the maternal role, part1. Processes, Nursing Research, 16(3), 237-245.
- 末永芳子,嶋松陽子,本田千浪(2005):出産体験の心理的影響,保健科学研究誌,2,51-58.
- 鈴木由美子(2015):バースレビューにかかわった経験からみえてきたこと,助産師雑誌,69(12),988-992.
- 梅本彰子,村山恵美子,高橋直子,他(2011):バースレビューを受けた褥婦の体験,日本看護学会論文集:母性看護,41,96-99.
- 和田サヨ子,近藤潤子(1986):出産後の想起(Review)による産婦の妊娠出産過程における情緒の分析—出産時の喪失体験を中心として—,日本看護科学学会誌,6(3),11-21.